



TITLE:

稲葉氏に謝す

AUTHOR(S):

瀧本, 誠一

CITATION:

瀧本, 誠一. 稲葉氏に謝す. 經濟論叢 1919, 8(4): 584-585

ISSUE DATE:

1919-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/127506>

RIGHT:

稻葉氏に謝す

瀧 本 誠 一

本誌第七卷第五號に稻葉岩吉氏は「王制の作者に就て」の一篇を寄せられ拙稿經濟漫錄(五〇)に宋の魏鶴山が王制は漢の孝文皇帝が博士諸生に命じて作らしめたるものゝ由記しあるが、鶴山の説の確據は何なるかを知らんことを欲したるに、稻葉氏はその後漢の碩儒廬植の説に出でたるものなること明なりとの示教を賜はりたるは余の深く感謝する所である、然るに稻葉氏は

更らに進んで廬植の説は史記の封禪書に因れるものならんと述べられたるが、成程封禪書に斯く記しあることなれば、鶴山の説も矢張り直に封禪書に基きたるものにあらざるか、余は稻葉氏の垂教を辱ふするまでは封禪書の事に氣付かざりしが、儒者の間に信用厚き史記に此事ある以上は、故らに廬植の説と云はんよりは史記を出典としたる方が穩當にはあらざるか、勿論封禪書の王制が鶴山の記るす王制若くは現行本の王制と異同如何は別問題なりども、兎に角稻葉氏が史記に此事あるを氣付かれながら、鶴山の説の出所を史記とせずして、廬植とせられたるは何にか確かな據ろあつて斯くは斷定せられしものなるか、曲園の説はいくら周知の事であつても鶴山の知るべき筈もなければ、何れ史記か廬植か其邊に違ひなかるべきも、余は未だ廬植の著作を見たることなきが故に何とも批判し難きを遺憾とするのである、廬植の著作に三禮解詁廬植集など之れあることを聞知し居れども、余は曾て之を手にしたることなし、稻葉氏は廬植

の何れの書に據つて鶴山の説の史記にあらずして廬植なることを認められたるか。重ねて一片の垂教を吝まざれば大幸の至りである。